

実践報告

小規模校の「強さ」を生かし、「弱さ」を克服する学習指導等の在り方 －学校・家庭・地域が一体となった「学びのシステム」の構築を目指して－

上村 悦男

愛媛県上島町立弓削小学校 yugeshou@town.kamijima.ehime.jp

要約：研究主題「小規模校の『強さ』を生かし、『弱さ』を克服する学習指導の在り方」の下、小規模校の「強さ」を少人数、「弱さ」を表現力に絞り、学校・家庭・地域が一体となった「学びのシステム」の構築を目指して実践に取り組んだ。

少人数のよさを生かす学習指導では、授業の中に、「フラッシュ学習（ICT機器を活用した振り返り学習）」と「トライ学習（教師が見取る演習）」を位置付け、授業をパターン化したり、「個人カルテ」により個に応じた指導を徹底したりすることにより、理解が遅れがちな児童が減少し、全体的に学力が向上した。

表現力を育む学習指導では、学習過程や学習形態を工夫した話し合い活動や「ことばタイム（語彙を豊かにする活動）」などを実施することにより、表現することを苦手と感じる児童が少なくなってきた。

学校・家庭・地域が一体となった「学びのシステム」の構築では、「夢現塾」などの学び直しの場や児童を称揚する場を設けたことにより、主体的に学習に取り組もうとする児童が増えてきた。また、学校の取組に対する保護者の理解が進み、学校と家庭との信頼関係が高まった。

キーワード

小規模校の「強さ」と「弱さ」
授業のパターン化
個人カルテ
伝え合う力の育成
学びのシステム

1. はじめに

本校は、愛媛県の最北で、広島県境に接する弓削島にあり、へき地1級の指定を受けている。校区は、瀬戸内の豊かな漁場と美しい自然の中にあり、1島内に県立高等学校と国立高等専門学校があるなど、教育環境は大変充実している。しかし、平成元年度に254人いた児童数は、少子化に伴い、平成29年度に元年度の約3分の1まで減少し、2桁の児童数となった。平成30年度の児童数は91名で、どの学年も1学級10人台の少人数となっている。

本校児童の学力・学習状況を平成27・28年度全国学力・学習状況調査（以下「27・28年度調査」という）の結果から見てみると、「どの学年も1学級10人台の少人数であるが、学習内容を十分に理解していない児童の割合は全国と比較してやや高い。」「家庭学習の時間は全国と比較して短い傾向にあり、8割を超える児童が学習塾に通っていない。」「表現することを苦手と感じている児童の割合は、全国と比較して高い。」などのような課題が明らかになった。

そこで、こうした本校児童の学力・学習状況の実態から、学校は教育活動の中で、児童の学習意欲を向上させ、確かな学力を確実に身に付けさせるためには、児童が「分かる」「できる」と実感できる「学びのシステム」を家庭や地域と連携・協力しながら構築するとともに、少人数という「強さ」を生かし、児童一人一人の学力・学習状況を確認しながら学力向上に計画的に取り組む必要があると考え、研究主題を「小規模校の『強さ』を生かし、『弱さ』を克服する学習指導等の在り方－学校・家庭・地域が一体となった『学びのシステム』の構築を目指して－」と設定した。

2. 実践目標と取組内容

小規模校の「強さ」と「弱さ」には様々なものが考えられるが、本実践では小規模校の「強さ」を少人数、「弱さ」を表現力に絞り、学校・家庭・地域が一体となった「学びのシステム」の構築を目指して取り組むことにした。

具体的には、児童一人一人に確かな学力を身に付けさせるため、少人数という本校の強みを生かし、1時間の授業や単元（領域）で形成的評価を確実にし、個に応じた指導を徹底することにした。小規模校の「弱さ」である表現力については、双方向の豊かな表現力を育むため、授業の中で小グループでの話し合い活動やICTの活用を充実するとともに、教育課程の中に「ことばタイム」や児童が方法を工夫しながら進んで表現する場を設定し、計画的に実践を進めることにした。実践のもう一つのねらいである、将来に役立つ望ましい学習習慣を身に付けさせることについては、学校・家庭・地域が一体となった「学びのシステム」を構築するとともに、学校ホームページ等を活用して家庭や地域への周知・啓発を積極的に行うことにした。

なお、実践に当たっては、校内におけるPDCAサイクルが効果的に機能するよう全国学力・学習状況調査や標準学力調査（東京書籍）などの客観的な資料に基づき、児童や保護者等の変容を数値により考察するようにした。また、本校は全教職員に占める若年教員の割合が高いため、授業研究の機会を増やし、実践目標を達成するためには、どのような実践を行っていけばよいかを具体的に示すようにした。

3. 実践の実際

(1) 少人数のよさ（小規模校の強さ）を生かす学習指導

1) 基礎的な学習内容の見取り（評価）を位置付けた授業のパターン化

時間	学 習 活 動	学習形態
0 5	フラッシュ学習「フラッシュ学習でウォーミングアップ！」 ・ プレゼンテーションソフト等を使って、単元（領域）の中で身に付けさせたい学習内容について、学習形態や活動方法を工夫しながら反復練習させる。	個人 小集団 一斉
10	学習課題の確認「今日の問題は、なんだろう？」 ・ 児童が1時間の授業に意欲的に取り組めるよう学習課題を工夫し、「授業のねらい」を黒板等に書いて提示する。 ・ 1時間の授業で何を身に付けなければいけないかを明確にし、理解させる。	一斉
15 20 25 30	課題解決「問題を解決しよう！」 ・ 時間をとって学習課題について個人で考えさせた後、小集団（ペア）や一斉での学習につなげるようにする。 ただし、学習内容によっては、必ずしも小集団（ペア）学習を入れなくてもよい。 ・ ICTを効果的に活用するなど、個に応じた支援を確実にし、一人一人が「分かる」「できる」と実感できるよう教材等を精選・工夫する。 ・ 学習形態を工夫し、他の児童の意見を受け入れ、認める場や個人の考えを深める場を設定する。	個人 ↓ 小集団 ↓ 一斉
35	トライ学習「トライ学習で、もっとできるように練習しよう」 ・ 授業のねらいを評価するのにふさわしい問題を選択する。 ・ 練習問題をさせた後、できた児童から採点し、理解の状況を正確に把握する。	個人
40	再指導 ・ 理解が不十分な場合には、再度指導する。 発展問題の演習 ・ 理解が十分にできている児童には、発展問題をさせる。	個人
45	授業のまとめ「今日の授業を振り返ろう！」 ・ 「授業のねらい」が達成できているかを自己評価させ、「個人カルテ」に記入させる。	個人 ↓ （一斉）

小規模校の「強さ」の一つは、常に授業が少人数で行えるということである。児童数が30人を超える学級では、一人一人の定着の様子を授業中に演習帳や学習プリントなどを使って確認するのに多くの時間がかかるが、少人数であれば、児童に演習やまとめなどをさせている間に、学級全員の定着の様子を確認することができる。

そこで、こうした小規模校の「強さ」を生かすため、左の図1のように「基礎的・基本的な学習内容の定着を図る授業パターン（授業パターン①）」を決め、全ての児童が授業の最初に提示した授業のねらいに到達できているかどうかを、教員が授業中に小テストなどを使って直接、見取るようにした。

まず、この授業パターンでは、二つの見取りの場を設けることにした。一つ目は、授業の最初に行う「フラッシュ学習」である。「フラッシュ学習」とは、プレゼンテーションソフト等を使って、本時の内容を学習する上で大切な基礎的・基本的な学習内容や、単元（領域）の中で確実に身に付けさせたい学習内容を5分程度の短い時間で何度も反復させ、定着を図る学習である。授業のねらいに到達させるためには、全ての児童が同じスタートライン（既習事項がある程度定着できている状況）に立っておく必要があると考え、1時間の授業の最初に位置付け、前学年の学習内容なども含め、繰り返

図1. 授業パターン①

返し学習できるようにした。また、このフラッシュ学習は、一斉の学習形態でテンポよく行うようにしているが、学習の途中ではグループや個人の学習形態を取り入れ、学級全体だけでなく、個人の学習の到達状況も把握できるように配慮しながら実施した。

授業パターンにおける見取りの二つ目は、「トライ学習」である。基礎的・基本的な学習内容についての指導を終えた後、教科書や演習帳などにある練習問題を解かせ、できた児童から教師が採点することにより、本時の学習内容がどの児童もきちんと理解できているかを教師自身が確実に見取るようにした。なお、この教師の見取りにより、理解が8割未満の児童には個別に再指導し、できるだけ1時間の授業の中で、全員の児童が授業のねらいを達成できるようにした。

2) 「個人カルテ」等に基づく個に応じた指導の徹底

27・28年度調査の結果から、学習内容を十分に理解していない児童の割合が、全国と比較してやや高いという課題が明らかになった。その原因には様々なことが考えられるが、児童自身ができることは何で、できないことは何なのかを正しく把握していなかったり、教師は児童ができていないと分かっているにもかかわらず意図的・計画的に対応してこなかったりしてきたことが主な原因ではないかと考えられる。

そこで、児童が自分の学習状況を把握し、教師も児童の自己評価を生かして授業改善ができるよう、右の図2のような「個人カルテ」を算数科において作成し、それをを用いて授業やその他の時間に個に応じた指導が適切に行えるようにした。

また、「個人カルテ」は、白表紙に貼って保管し、単元の学習終了後、テストと一っしょに返却することにより、保護者が学習内容の理解の状況を踏まえて子どもを支援できるようにした。

加えて、理解の遅れがちな児童に対しては、授業中の支援だけでなく、家庭での様子などを含め、個の学力・学習状況を諸調査から具体的に把握した上で、全教育活動を通じ、指導また支援することが大切であるので、学級の中で特に指導・支援を要する児童については、学力向上のための「個別の指導計画」を作成し、様々な場面で個に応じた指導が徹底できるようにした。

(2) 表現力（伝え合う力）を育む学習指導

1) 表現力を育むための学習過程や学習形態等の工夫

小規模校の「弱さ」の一つは、表現力である。幼少期の頃から人間関係が固定化され、特に多くのことを話さなくても自分の気持ちを理解してもらえたり、いろいろな人と出会い、知らない人とも話をしなければならない場面が少なかったりするため、進んで自分の考えを表現しようとする意欲や、相手に分かってもらえるように、話す内容や方法等を工夫して表現する力が弱い。

そこで、こうした小規模校の「弱さ」を克服するため、次頁の図3のように本校が目指す「表現力」を定義するとともに、図4のように「伝え合う力を育む授業パターン（授業パターン②）」に基づき、小集団、全体での伝え合いを中心に授業を組み立て、実践した。

算数個人カルテ

6年松組 番 氏名

単元名	円の面積			
単元の目標	円の面積の求め方を考え、それを用いることができる。			
評価規準	やる気	見積もりや様々な操作活動を通して、円の面積をこれまで習った図形と関連付けて求めようとするができる。		
	考える	円の半径と面積の関係や円の面積の求め方を考えることができる。		
	できる	公式を使って円の面積を求めたり、円や三角形をもとにして曲線図形の面積を求めることができる。		
	分かる	円の面積を求める公式を理解している。		
時 番号	学 習 状 況	自分	先生	
1	1	円の中心・半径・直径が分かり、円周の長さを求める公式を使って、長さを求めることができたか。	○	○
2	2	円の面積は、半径を1辺とする正方形の面積の2倍より大きく、4倍より小さいことが分かったか。	○	○
3	3	円の面積は、半径を1辺とする正方形の約3.14倍であることが分かったか。	○	○
4	4	円の面積を求める公式を求められたか。★	△	△
4	4	円の公式が半径×半径×3.14 台形はあまりむずかしくないので、まずはここから		
5	5	円の面積の公式を使って、円の面積を求めることができたか。	○	○
6	6	複雑な形をした図形の面積を求め方を説明することができたか。★	○	△
6	6	複雑な形をした図形の面積を求めようとしたら、人にすぐわかることが分りました。		
7	7	複雑な形をした図形の面積を求めることができたか。	○	△
8	8	円の面積の公式を用いて、円の面積を求めることができたか。(P74①)	○	○
9	9	図形を変形したり、補助線を引いたりして、図形の面積を求めることができたか。(P74④)	○	△
学習をふり返って		先生から		
色々な形をして、むずかしくたけど、ついにわかった。もうわかった。		はじめて、難しそうでも、工夫すると簡単に解けることがわかりました。図に補助線をかいてみるとよくわかるよ。		

図2. 個人カルテ

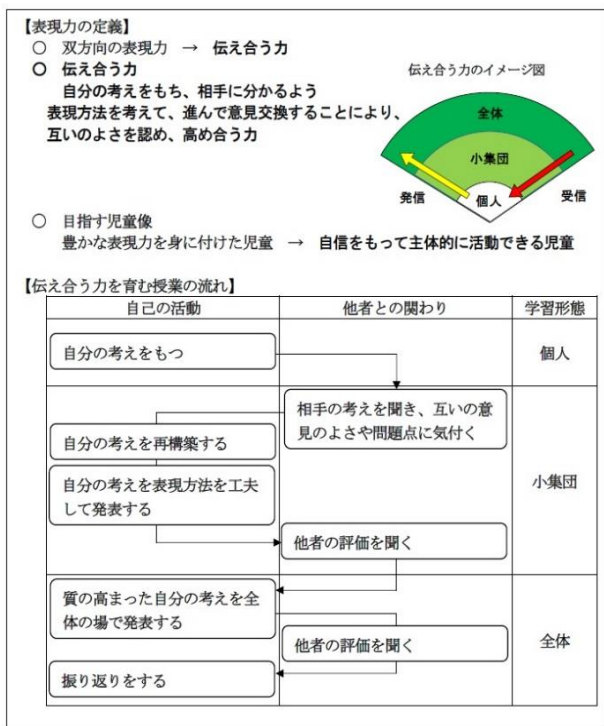


図3．表現力の定義

時間	学習活動	学習形態
0	学習課題の確認「今日の課題は、なんだろう？」 ・ 児童が1時間の授業に意欲的に取り組めるよう学習課題を工夫し、「授業のねらい」を黒板等を書いて提示する。 ・ 児童が興味・関心があり、自己の考えや意見を伝え合うことができる学習課題を設定する。	一斉
5		
10	小集団による課題解決 「自分の考えを友だちに伝えたり、友だちの考えを聞いたりして問題を解決しよう！」	個人 ↓ 小集団
15		
20	・ 個人の考えをノートやワークシートに書かせることにより、自分の考えをもって話し合い活動に参加できるようにする。 ・ 小集団の人数は2～4名までとし、小集団の中で意見を互いに伝え合ったり認め合ったりする。 ・ 思考ツールを効果的に活用し、充実した話し合い活動ができるよう配慮する。	
25	・ 自分の考えを、表現方法を工夫しながら相手に伝えられるようにする。 ・ 初めは、自分の言葉で伝えられない児童も友だちの意見や考えを聞くことで自分の意見や考えを伝えられるようにする。	
30		
35	全体での課題解決 「みんなで話し合って問題を解決しよう！」 ・ 小集団の発表だけで終わるのではなく、その発表に対してどのように感じ、考えたかを話し合う。 ・ ICTや板書などを効果的に活用し、相手に分かる声の大きさで、友だちに自分の考えを伝えることができるようにする。	全体
40		
45	授業のまとめ「今日の授業を振り返ろう！」 ・ 1時間の授業の感想を個人カルテに書かせ、何が身に付き、どのように考えるようになったかを伝え合わせる。	個人 ↓ 一斉

図4．授業パターン②

2) 豊かな表現力を身に付けさせる「ことばタイム」や表現の場の設定

ア 表現することの楽しさを味わわせる「ことばタイム」の実施

表現力を育むためには、表現することの楽しさを味わわせたり、語彙を豊かにしたりすることが大切である。

そこで、月・水・木・金曜日の8時00分から8時10分の10分間を「ことばタイム」として設定し、読書や音読・暗唱の活動などに取り組ませた。

イ 方法を工夫しながら、進んで表現する場の設定

本校児童は、へき地小規模校のためか、主体的に活動したり、進んで表現したりしようとする意欲や態度に欠けるところがある。特に、島外に出て、知らない人といっしょに活動したり、自分の考えや意見を相手に伝えたりすることが苦手な児童が多い。

そこで、次の図5、6のように、集会活動だけでなく、学校行事や総合的な学習の時間などを利用して、方法を工夫しながら、進んで表現する場を意図的に設けるようにした。



図5．かみ研キッズ



図6．修学旅行でふるさと紹介

また、互いのよさを認め、高め合う力を醸成するため、図画工作科の作品には、「自分の感想」に加え、「友だちの感想」も書かせるようにし、友だちの作品のよさを感じ取り、そのよさを書いて相手に伝える場を設けた。

(3) 学校・家庭・地域が一体となった「学びのシステム」の構築

1) 『みんなの学習クラブ』を核とした「学びのシステム」の構築

小学校学習指導要領解説には、「当該学年までに学習する内容の確実な定着を図ることが必要」と書かれているが、27・28年度調査の結果をしてみると、本校は学習内容を十分に理解していない児童の割合が全国に比べやや高く、塾に通っていない児童の割合も全国に比べて高い。

こうした学校の実態を受け、右の図7のように、学校や家庭にあるパソコンやタブレットを活用し、(株)日本コスモピアが作成・提供している『みんなの学習クラブ』を使って学習できる場を授業以外に四つ設定した。一つ目は、昼休みのパソコン室の開放である。児童によってはパソコンやプリンターがない家庭もあるので、誰でも自由にパソコンを使って、学習プリント(2iプリ)をダウンロードして学習できるようにした。また、1階マルチルームに低学年用のパソコンを設置し、バーコードリーダーで学習プリントが簡単にダウンロードできるようにした。二つ目は、毎日行っている「3)チャレンジタイム」での活用である。教師は事前に「チャレンジタイム」で学習する国語や算数の学習プリントを支援員の協力を得て印刷しておき、それを15分間の「チャレンジタイム」の時間に使って学習させるようにした。三つ目は、5・6年生を対象とした放課後に行う「夢現塾」である。児童は個人の「進捗表」に従って、学習プリントをダウンロードして学習を進め、理解の遅れがちな児童には、教師や支援員等が個別に指導する機会を設けるようにした。四つ目は、家庭での『みんなの学習クラブ家庭配信版』の活用である。IDを児童一人一人に与え、パソコンやタブレットのある家庭では、個々の進捗に従って自主学習ができるようにした。

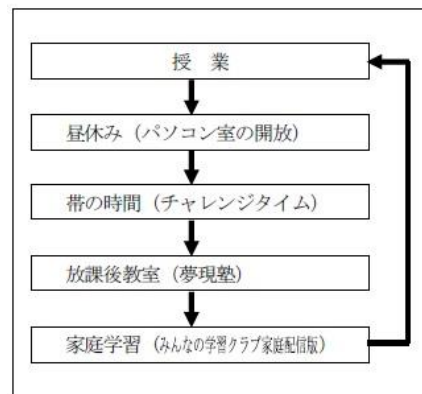


図7. 学びのシステム

このように、児童が『みんなの学習クラブ』を活用しながら学習の振り返りを行う場を複数設けることにより、教職員や保護者等の学習支援の下、分からないことを分かるようにしながら、当該学年までに学習する内容が確実に身に付けられるようにした。

2) 「夢現塾」による学び直しの場の設定

本校スローガン「子どもたちの夢を現実にする学校」にあるように、子どもたちの夢を実現させるためには、基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得させることにより、自己に対して自信をもたせ、児童一人一人の可能性を広げていくことが大切である。

そこで、5・6年生の希望者を対象に、算数の学び直しができる場「夢現塾」を開講し、複数の教師と弓削商船高等専門学校の学生「弓削っ子サポーター」で月・火・木・金曜日に、『みんなの学習クラブ』を使って約30分の補充学習を行っている。弓削っ子サポーターに積極的に関わってもらうため、児童が間違った問題をどのように解いたのか弓削っ子サポーターに説明するようにした。

3) 主体的に学習に取り組もうとする意欲や態度の育成

ア 弓削っ子応援ゆるキャラ「カミジマン」の活用

児童の活動意欲を向上させるため、(株)インターナルデザインのご協力を得て、弓削っ子応援ゆるキャラ「カミジマン」を作成した。

この弓削っ子応援ゆるキャラ「カミジマン」を、学校だよりや学校ホームページなどに登場させることにより、児童に「目標をもって、自らが進んで活動すること」の大切さや、母校弓削小学校を愛する心情を育むことができるようにした。



図8. 「カミジマン」学習シール

また、弓削小学校PTAと同窓会のご協力を得て作成した「カミジマン」学習シール（図8）を主体的に学習活動などに取り組んだ児童を称揚する際に活用し、学習への意欲化を図った。

イ 主体的に自主学習に取り組んだ児童の表彰

児童の学習意欲を維持・向上させるためには、目標をもたせ、達成できたことを称揚する場を設けることが大切であると考え、「学びのシステム」の中で使った全ての学習プリントを一つのファイルに綴じさせ、基準を設けて表彰するようにした。

また、それぞれのポイントに達成した児童の名前を学校ホームページに「今週の100ポイント達成者」として毎週掲載し、家族はもちろん、多くの人からその努力を認めてもらえるようにした。

4) 家庭・地域と連携して、望ましい生活習慣や学習習慣を身に付けさせるための工夫

ア 学習強調週間の実施

小学校学習指導要領解説には、「低・中学年において学習習慣を確立することは極めて重要であり、家庭との連携を図りながら、宿題や予習・復習など家庭での学習課題を適切に課すなど家庭学習も視野に入れた指導を行う必要がある。」と、家庭との連携を図りながら学習習慣を確立していくことの大切さが述べられている。

そこで、毎月、月初めの第1週を「学習強調週間」と位置付け、起床時間、朝食、学習時間、テレビ等の視聴時間（ゲームを含む）、睡眠時間を、右の図9のように児童に記録させ、学習強調週間中は毎日、保護者に確認してもらった。

また、調査票を学級担任が確認・得点化し、目標が達成できた児童は称揚するようにした。

学期末の個別懇談会では、学習時間とテレビ等の視聴時間について集計した懇談資料を渡し、小学校の早い段階で生活習慣や学習習慣を確立させることが大切であることや、子どもの実態を正確に捉え、ただ叱るのではなく、しっかりと話し合いを行い、家庭内でルールを作ることが重要であることなどについて話題に出しながら、懇談を進めるようにした。

9月 生活・学習習慣調べ

★ 時刻や時間、よくできた○、できなかった△を付けましょう。 ()年 氏名()

めざせ！ 家庭学習のめあて 算数、国語の自由べんをいばす。

生活のめあて テレビ、ゲームの点数を10点以上にする。

月日(曜日)	起床時間	朝食	学習時間	自主勉強	テレビ・ゲーム	生活のめあて	家の人の印	先生の印
9/4 (火)	8:00	○	50分	毎日ドリル3ページ ピアノ文章問題15	40分	9:50	△	22
9/5 (水)	6:25	○	60分	毎日ドリル6ページ ピアノ文章問題3	30分	10:00	△	
9/6 (木)	6:30	○	55分	ピアノ 読書	35分	9:30	△	
9/7 (金)	6:25	○	50分	ピアノたんい 国けい4ページ 毎日1	30分	11:50	○	
9/8 (土)	9:20	○	50分	ピアノたんい 国けい4ページ 毎日1	40分	10:20	○	
9/9 (日)	8:00	○	50分	ピアノ読書たん いと国けい4ページ	30分	9:20	○	
9/10 (月)	6:20	○	60分	ピアノ読書たん いと国けい10ページ	25分	9:30	○	
家庭学習平均時間			53分	★「めあて」が達成できたか、振り返ろう。				

自分の振り返り
いろいろな質問集を
書いておきたい質問
を添えていきます。

家の人から
身体が疲れたり、何か
勉強モードには入れず、少ししんどいから
そんな時は、ピアノの練習を(てから)
勉強を(て)り、勉強を変えて頑張った。

先生から
国語、算数どちらも
いろいろなP51問題量とどんど
習得められていました。今日は
質問集集を添えてきたので
学習しました。

図9. 生活・学習習慣調べ

イ 学校ホームページ等を活用した家庭や地域への周知・啓発

学習強調週間での子どもたちの様子が分かるように、学校ホームページに毎月「家の人のコメント」を掲載し、各家庭でどのように指導・支援していけばよいかを具体的に啓発するようにした。

また、子育てに不安を感じている保護者が少しでも自信をもって取り組めるよう、次頁の図10のように、必要に応じて「家の人のコメント」に学校側からもコメントを加えて学校ホームページに掲載することにした。

さらに、学校ホームページに「子育てQ&A」のコンテンツを設け、しつけを始めとする子育てに悩みをもつ保護者が参考にできるようにした。

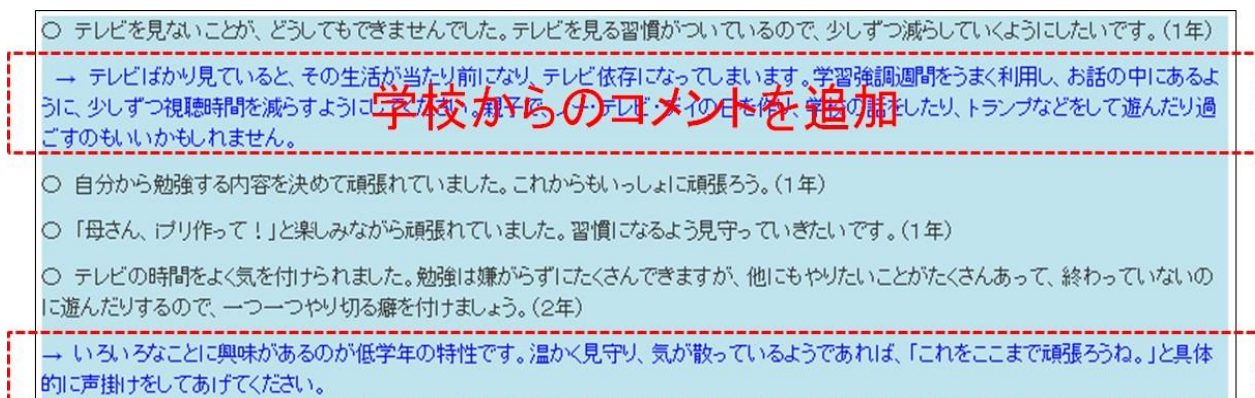


図 10. 家の人のコメントと学校側からのコメント

4. 実践のまとめ

(1) 確かな学力について

本校児童の学力状況の変容を、平成 29・30 年度全国学力・学習状況調査（以下「29・30 年度調査」という）の結果を基に、27・28 年度調査の結果と比較しながら見てみると、次の図 11 のとおり、全国の平均正答率を 100 とした場合の本校の全国との平均正答率の差は、平成 27・28 年度は全国とほぼ同程度か、下回っていたが、平成 29・30 年度は、全ての教科で全国を上回った。特に、国語Bと算数Bは、年を追うごとに着実に向上してきている。

また、国語と算数の正答率分布状況を見てみると、次の図 12 のとおり、平成 29・30 年度は、国語も算数もA・Bともに全国の平均正答率を下回っている児童の割合は全国の割合を下回り、目標としていた30%を切った。

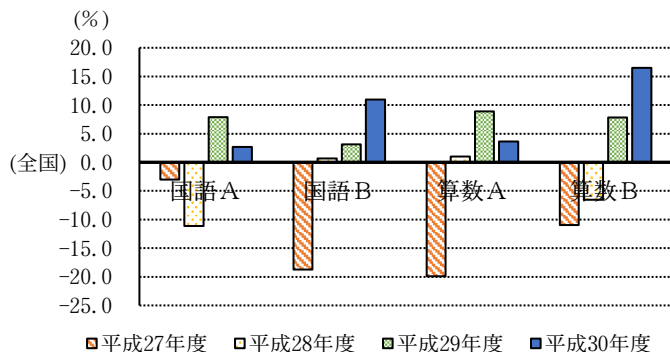


図 11. 全国の平均正答率との差の推移

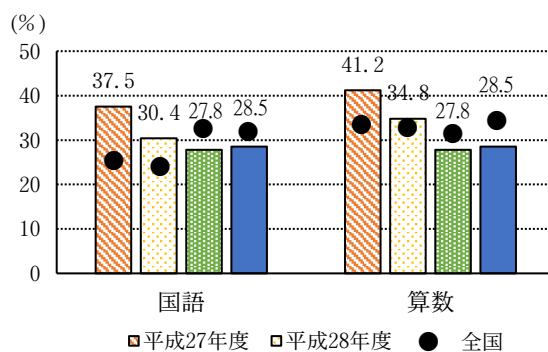


図 12. A・Bともに全国を下回る児童の割合

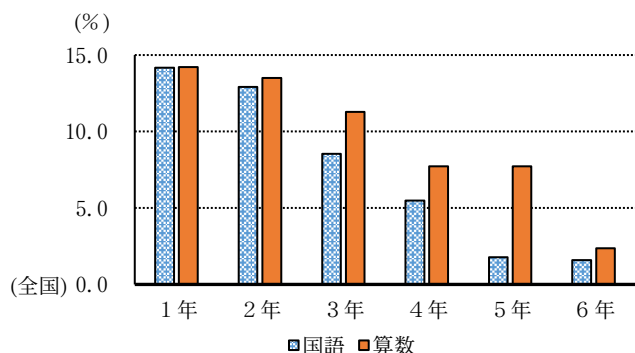


図 13. 標準学力調査から見た本校の学力状況

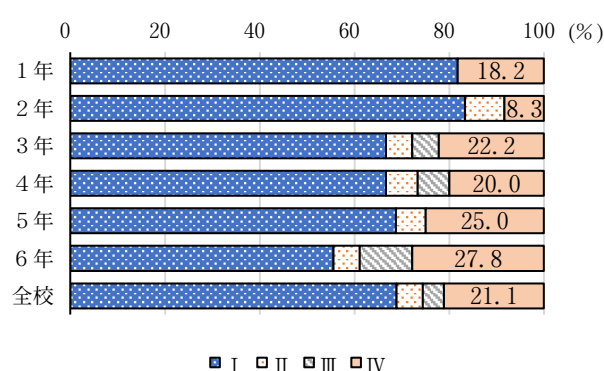


図 14. 標準学力調査から見た正答率分布状況

次に、平成 30 年 2 月に全学年を対象として実施した標準学力調査（東京書籍）の結果から、全国の平均正答率を 100 とした場合の本校の全国との平均正答率の差を見てみると、前頁の図 13 のとおり、国語、算数とも全ての学年で全国を上回った。

また、国語と算数の正答数分布状況を前頁の図 14 のように、Ⅰ～Ⅳ（Ⅰ：国語・算数ともに全国の平均以上、Ⅱ：国語は平均以上 算数は平均未満、Ⅲ：国語は平均未満 算数は平均以上、Ⅳ：国語・算数ともに全国の平均未満）の 4 つのグループに分けて見てみると、国語・算数ともに全国の平均正答率を下回っている児童の割合は 21.1% で、どの学年も目標の 30% を切った。

(2) 豊かな表現力について

29・30 年度調査にある記述式問題（B 問題）の調査結果を基に、表現力の状況を 27・28 年度調査の結果と比較しながら見てみると、全国の平均正答率を 100 とした場合の本校の全国との平均正答率の差は、学力の状況と同様に、平成 27・28 年度は全国とほぼ同程度か、下回っていたが、平成 29・30 年度は国語、算数とも全国を上回った。

また、平成 30 年 2 月に全学年を対象として実施した標準学力調査（東京書籍）にある記述式問題の調査結果を全国の平均正答率と比較しながら見てみると、次の図 15 のとおり、全国の平均正答率を 100 とした場合の本校の全国との平均正答率の差は、2 年生の算数を除き、上の全国学力・学習状況調査の結果と同じく、全国を上回った。

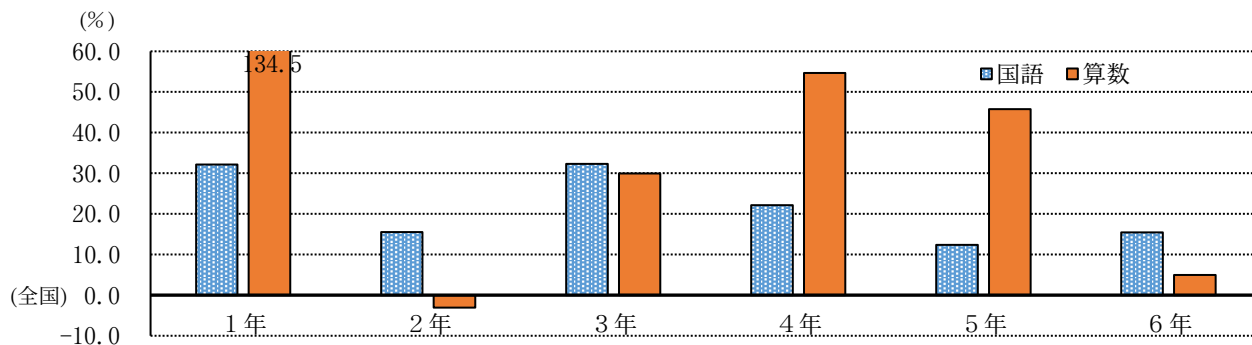


図 15. 標準学力調査（東京書籍）における記述式問題の調査結果

次に、平成 30 年 9 月に全校児童を対象に実施した「伝え合う力に関するアンケート」の結果を見てみると、「友だちの意見や考えを聞いて聞いている（設問 3）」「自分の意見や考えを相手に伝えることは大切だ（設問 9）」と思っている児童の割合は、ほぼ 100% で、積極的肯定意見の割合も約 8 割と高い。しかし、「進んで自分の意見や考えを友だちに伝えている（設問 1）」「分かりやすく自分の意見や考えを友だちに伝えている（設問 2）」「友だちの意見や考えを聞いて、友だちのよいところを参考にしたことがある（設問 8）」と思っている積極的肯定意見の割合は 50% を下回り、否定的意見の割合が 10% を上回っている。また、「自分の意見や考えを相手に伝えることは、得意である（設問 10）」「自分には、よいところがある（設問 11）」と思っている積極的意見の割合は 40% を下回り、否定的意見の割合が 20% を上回っている。

(3) 望ましい学習習慣について

平成 28 年度から導入している『みんなの学習クラブ家庭配信版』の活用状況（平成 29 年 4 月～平成 30 年 7 月）を利用者の全校児童に占める割合から見てみると、利用者の割合は学年初めの 4 月と夏休みの 8 月に 3 割から 4 割まで減少しているが、他の月は平均して 6 割から 7 割の児童が、『みんなの学習クラブ家庭配信版』を利用して学習できている。また、全ての学習プリント（i プリ）をファイルに綴じさせ、100 ポイントごとに認定するようにしているが、平成 29 年度は、7 割を超える児童が目標の 300 ポイントを達成した。1000 ポイントを超えた児童も 7 名おり、そのうちの 1 名は、3000 ポイントを達成することができた。

次に、29・30 年度調査における児童質問紙調査の学習時間に関する設問の結果を見てみると、「普段（月～金曜日）に 2 時間以上勉強する」児童の割合は平成 29・30 年度とも、全国と比較して低い。しかし、「1 時間以上

2時間未満勉強する」児童の割合は9割を超えており、家庭での学習時間が確実に確保できるようになった。

平成29年度（調査期間10か月）、平成30年度（調査期間3か月）に実施した学習強調週間中の家庭学習の平均時間を見ても、個人差はあるものの、目標としている「学年×10分+20分」の学習時間がどの学年も確保できるようになった。

(4) 学校と家庭との信頼関係について

毎月実施している「生活・学習習慣調べ」にある保護者のコメントを見てみると、当初は子どもに厳しかった保護者が、少しずつ子どもの様子を具体的に見て、頑張ったことを認め、褒めるようになったものや、子どもの行動から自分の関わり方を見直すようになったものが徐々に増えてきた。

次に、保護者の集団構造の分析から学校と保護者との信頼関係を見る「P-TRUST 2017」（愛媛大学）により、平成28・29年度の結果を見てみると、次の図16のとおり、平成29年度は、「適応」集団の割合が信頼される学校の目安となる35%を上回るとともに、「回避」集団が減って、「適応」集団が増えた。

また、「P-TRUST 2017」のうち「適応比率×回収率」で求める「関係的信頼係数」を見てみると、次の図17のとおり、平成29年度は、信頼される学校の目安となる28ポイントを20ポイント程度上回り、平成28年度と比べも5ポイント以上高くなった。

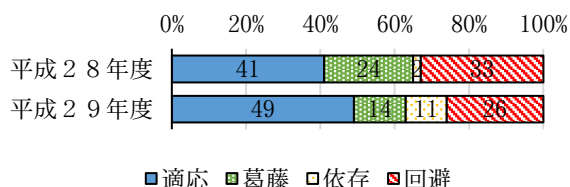


図 16. P-trust（愛媛大学）による保護者セグメント

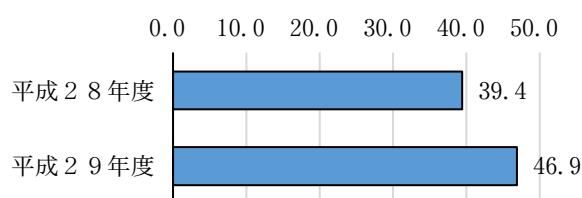


図 17. P-trust による関係的信頼係数の推移

(5) 課題と今後の取組

1) 少人数のよさを生かす学習指導について

確かな見取りを位置付けた授業パターンによる授業を行ったり、「個人カルテ」や「個別の指導計画」に基づき、個に応じた指導を徹底したりしたことにより、全体として学力が向上した。日々の実践の中で理解の遅れがちな児童への指導・支援を特に意識して実践してきたが、全ての児童に一定程度の学力を身に付けさせるためには、個の実態を様々な視点から正確に把握し、家庭との連携をより一層図りながら、計画的に個別指導を積み上げていくことが必要である。

2) 表現力（伝え合う力）を育む学習指導について

小集団での話し合い活動を充実したことにより、学力面では知識・技能を活用する力が伸びた。「ことばタイム」や表現の場を設定することにより、物怖じせず人前で表現することが少しずつできるようになってきた。しかし、自己肯定感が低く、表現の工夫といった点では、まだ不十分な点が見られるので、今後は今まで以上に教育課程全体を通して伝え合う力を育む必要がある。

3) 学校・家庭・地域が一体となった「学びのシステム」の構築について

学校・家庭・地域が一体となった「学びのシステム」を構築できたことにより、保護者から積極的な協力が得られるようになり、望ましい生活習慣や学習習慣が身に付いてきた。また、学校ホームページ等で、子どもたちの学びや家庭での取組の様子を継続して家庭や地域へ周知・啓発したことにより、学校と家庭・地域との信頼関係が高まった。今後は、より多くの保護者から一層の協力が得られるよう、各取組の内容や方法について引き続き検討していきたい。

5. おわりに

研究主題「小規模校の『強さ』を生かし、『弱さ』を克服するための学習指導等の在り方 ―学校・家庭・地域が一体となった『学びのシステム』の構築を目指して―」の下、教職員はもちろん、児童も保護者も、みんなが一つになって実践に取り組んできた。結果として、児童は、『みんなの学習クラブ』を活用し、主体的に学習に取り組むことができるようになってきた。また、教職員は、I C T 機器を積極的に活用し、基礎的・基本的な学習内容を定着させ、伝え合う力を育成するための授業が行えるようになってきた。自己肯定感の育成など、まだまだ改善すべきことはあるが、全国学力・学習状況調査の結果などに少しずつ成果が見られるようになり、児童も教職員も「やればできる」と実感でき、自信が芽生えてきているように思う。

研究としては、本年度が最終年度となるが、本実践は日々の実践を地道に積み重ねていくものなので、今後も学校教育の質の向上を目指し、「チーム弓削小」ではなく、家庭や地域との連携・協力をより密にした「チーム弓削」として、焦らず、じっくりと実践を深めていければと思う。また、⁴⁾本居長世作詞・作曲による本校校歌の歌詞にある「進みてやまぬ人となれ」をしっかりと胸に刻み、「進みてやまぬ学校」となれるよう改善を積み重ね、「子どもたちの夢（ゆめ）を現実（げんじつ）にする学校」にしていきたいと思う。

註

1) みんなの学習クラブ

インターネットを使って、各学年4教科（中学校5教科）の学習プリントが「定着」・「標準」・「発展」と習熟度別にダウンロードできるもので、学習内容をアニメーションで解説した「マルチメ解説」は学校の授業だけでなく、家庭でも活用することができる。

2) i プリ

「みんなの学習クラブ」からダウンロードできる学習プリントの通称

3) チャレンジタイム

月曜日から金曜日までの13時35分から13時50分の時間帯で行っている国語科と算数科の帯学習の通称

4) 本居長世

「七つの子」「青い眼の人形」「汽車ぼっぼ」などを作曲した童謡作曲家

謝辞

研究全体について、具体的にご指導をいただいた愛媛大学大学院教育学研究科 城戸 茂教授、また、貴重な資料を提供していただいた愛媛大学大学院教育学研究科 露口健司教授、(株)日本コスモトピアに対し、心から御礼申し上げます。

参考文献

露口健司編著(2015)『学力向上と信頼構築』ぎょうせい

文部科学省(2008)『小学校学習指導要領』東京書籍

文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説』東洋館出版社